



いよいよ33回総会が間近に迫る。本総会は、震災復興と日本社会の再生に向けた、「協同労働運動の10カ年総合戦略」と、その前半期を決する「3カ年計画」確立が主題となる。組合員にとっての協同労働の協同組合から、地域・市民にとっての組織へと、事業・経営のすべてを大きく転換していく契機となる総会である。中でも、「FEC自給コミュニティの創造」の本格的な挑戦がはじまるが、その本質とは何かを明らかにし、創造性豊かなFEC仕事おこしを呼び起こさねばならない。

FECとは、命が生きるための基本要件であるが、それが日常当たり前にあることに思いをはせ、想像を働かせる中で、決して平易な日々の足元があるわけではなく、その全てが奇跡の連続のような「生きる」を構成している。その中にこそ「希望」のかけらがある。

長野県伊那市にある直売所グリーンファームを半年ぶりに訪ねた。相変わらずの賑わいで、年間100万人が訪れるパワーに圧倒される。小林会長とその秘訣を巡って杯を酌み交わして思ったのが、「感動」の二文字である。小林会長は「面白いから人が集まる。生産者も、消費者も、働くスタッフも楽しいから集まる」という。生産者の感動、消費者の感動、職員の感動…。それは直売所という交わりの場によって生まれている。その要諦は何なのかと考えを

めぐらせれば、市場の存在に行き着く。市場主義はその存在を大きくすればするほど、人と人の距離を遠退ける。それが感動の大きさに関係している。人の交わりの中に感動があり、それに直接触れた人々が次の感動へと向かう。そして物語となる。しかしその感動は、ドラマティックなものばかりでなく、むしろ当たり前に見過ぎてきた小さな小さなこと…例えば今日もまた生き続けているという喜び…の方が多。逆境の社会が広がる中で、それを超える希望のかけらは、こうした日常の感動であり、それをつなぎ合わせ結び合わせる物語が、感動を生んでいく。協同労働の本質は、この希望と感動を見出し生み出すことに思えてきた。

総会が終われば、IYCのイベントが続く。協同組合陣営の中でも、そのネットワーク化が志向され、交流が旺盛になってきた。逆境の中でこそ真価を発揮するのが協同だとしたら、日本の協同組合は、協同の中に小さな希望を見出し、それをつなぎ合わせて感動を育てる存在にならねばならない。そのためにも、「貧困」「失業」「社会的排除」に真っ向から立ち向かう協同組合運動でありたい。それは、一人ひとりの組合員がこの逆境の時代をどう生きるか、に影響を与えうる協同組合になるということだ。岩手・埼玉と連続開催される「全国協同集会」を期待したい。